第７回
０歳から始まる保幼小の連携

講師　岡村　由紀子　氏

はじめに

就学へ向けての連携というと、年長児のいる園と小学校とが交流をしたり、情報交換をしたりして、スムーズに学校に慣れるようにするという「見える部分の連携」が多いのですが、私たちの教育、保育という仕事はどういうものなのか、学校教育とはなんなのか、そこをじっくり考えていくことで、子どもが小学校に行っても困らないようにするための「見えない部分の連携」を考えていきたいと思います。

Ⅰ、教育・保育とは何か？…人格の形成

教育・保育の目的は、自分自身の中に「人間らしく生きていく力」を育てることです。

信頼関係を作り、可能性に働きかけることであり、これは決してサービスではありません。

乳児期の保育は養護性(自立する基本的生活力)を育てながら人格を形成するものです。

Ⅱ、学校と幼稚園・保育園の共通性と個別性

＊共通性…子どもが集まることによって生まれる教育力（人間関係）に働きかけます。

＊個別性　幼児期…感性感覚に働きかけます。（あそび）

学童期…抽象的思考が発達することで聴覚、視覚を中心とします。(学習)

指導の特徴としては、幼児期は間接的指導で、遊びや生活を経験しながら学んでいけるような働きかけをしていきます。一方、学童期は「今日は〇を学びます」という直接的な指導です。

就学するにあたって育てておきたい力として、三つの力があります。一つ目は、一定時間、集中して座っていることができる力です。これは、体と集中力の問題です。集中力というのは、認知の発達で見通しがもてるかどうかです。「今この学習時間が大事」ということがわかっていれば、座っていることができます。二つ目は、言葉でのコミュニケーションの力です。三つ目は、抽象概念、想像力です。これらが育っているかが大事です。

Ⅲ、乳幼児期の指導構造

教育とは、指導によって子どもを変えていく仕事です。幼児期の指導は特に環境が大切です。室内や園庭で、子どものどういった発達を促していくのかを考えていきます。子どもは体の発達してきた部位を動かしたくなるものなので、その部位を動かしたくなるような環境や遊びを考えます。園内だけでなく、公園や土手など地域で探すとよいでしょう。

環境の中でも重要なのは、人的環境である保育者などのまわりの大人や友達です。子ども同士でトラブルになったときに、保育者がどのような対応をするかで、子どもにとって、そこが安心できる場なのかどうかが変わってきます。

まわりの大人、一緒にいる子、気に入った子、お兄さんお姉さん、小さい子、これらすべてが、子どもが育っていくときの環境になるのです。ですから、保育者集団の質が保育の質となり、一人の保育者が頑張っていてもよい保育はできま

せん。「ここだけは大事にしたい」ということを保育者間で話し合っていくことが大切です。

保育には、養護と教育があります。養護は、食事、睡眠、着替え、排泄などで、見える力です。自分で食べる、自分で眠る、自分で着替える、自分で排泄をするようになる為に、私たち保育者は、その養護性の中に教育という視点を入れ、見えない部分の人格を育てます。具体的には、子どもたちが「意欲的」に自分のことが出来るようにしていくのが、私たち保育者の役目です。

教育は、遊びが中心です。見えるところは、ジャンプができる、折り紙を折れる、走れる、歩けるようになることです。言葉の前の言葉は、指さしです。人間関係というのは、最初は泣くことから始まります。認知というのは、いろいろなことがわかってくることです。人見知りというのは、「この人がいい」ということがわかったということで、アタッチメントの成立の始まりです。

遊びは、どういう質の遊びになるかということが大切で、おもしろさの追求です。私たち保育者はどうしたらその遊びがおもしろいものになるのか考えていかないといけません。子どもはおもしろいと感じると、とても意欲的に取り組みます。活動の主人公になり、主体的になります。この力が学校に行ってからの学びに向かう土台となります。「日本の幼児教育の父」と呼ばれる倉橋惣三氏は、幼児教育で文字を教えるとは言っていません。文字は、自分の気持ちを伝えるものということを知り、伝えたい気持ちがあることが文字教育の第一歩です。自分の気持ちを伝えることができ、文字を使いたくなる経験をすることで、文字のおもしろさを伝えていきます。

Ⅳ、乳幼児期の体と心の主人公の育ち‥学校へのまなびに繋がる

からだの主人公

乳児期からの排泄・食事・睡眠・着替え・清潔などの自立する力の形成は、1歳児から始まります。子どもの様子を見て「お腹空いたね」「眠たいね」と子どもの体で起きていることを言葉にすることを代弁といいます。それを繰り返すことで、子どもは自分の体で起こっていることが何なのか知っていきます。「汚れちゃったね」「きれいになったね」と、子どもの体で起きている変化すべてに言葉をつけていくことが、教育です。

排泄というのは、おむつが濡れたから排泄したことに気が付いて自立していくのではありません。膀胱がいっぱいになったという体の変化に子どもが気づけるようにするのが教育です。神経系の発達によって気がつくようになるので、早くに取り組めばいいというものではありません。歩行が確立して言葉が出始めたら「出るかな」とトイレに誘います。子どもが「いや」といったら無理には誘いません。出たら、「出たね」「気持ちいいね」と声を掛けます。おむつに出てしまったときには「濡れて気持ち悪いね」「替えようね」と声を掛け、替え終わったら「すっきりしたね」「気持ちがいいね」と声を掛けます。最後にお腹を触って「ここがね、今度おしっこ出そうになったら教えてね」と伝えます。この繰り返しで、子どもは自分の体の変化に気づいていきます。

1歳児から2歳児にかけて「いや」という時期がきます。この「いや」とは、子どもの独立宣言なのです。大人の言う通りになりたくないという心が育ってきた証拠です。自己肯定感の芽生えなのです。0歳児の赤ちゃんは泣いて知らせ世話されることで、「泣いてもいいんだ」という感覚を体に感じます。大事に育てられたからこそ、「いや」というようになります。

しなやかな体と手指の育ちとは、乳児からの十分な遊びの環境や素材に触れることが大事です。1歳になるとテーブルの上に乗りたくなりま

す。そのとき「あ、だめ。そこは食事をするところでしょ」と注意するのではなく、この子は足腰が発達してきたから、その力を発揮させたいんだなと、思う存分に登れる環境を考えます。ティッシュをつまみ出す動作や引き出しから物を出す行動も同様です。子どもの「やってみたい」は、その子の中に育ってきた新しい力です。特に乳児にはその力を発揮できるような環境を整え育てていきます。

心の主人公

「いやいや」の気持ちが芽生えるために、豊かな遊びの経験が必要です。その中で、自我と自我のぶつかり合いでトラブルが生まれます。楽しく遊ぶために「じゃあ、こうしよう」と考える力がついてきます。そばにいる保育者が代弁、共感し支えることで、交際能力、運営能力もついてきます。これが育っていくことで、大きくなってくると豊かな話し合いができるようになります。大事なのは、自分の思いを伝え、相手にも意見があることを知ることです。

遊びは、おもしろい、楽しいがあるからこそ意欲的になります。そして、想像力を育てます。乳児期からのふり・みたて・つもり・ごっこ遊びは、論理的思考や科学的思考への過渡期にあっての橋渡しとなります。遊びに熱中することで、自己調整力（体と心の主人公）、持続力の形成、思考言語（外言から内言へ）が育ちます。

そして、時間的見通しや空間的見通し科学的見通しがついてきます。概念形成もできてきて、数の認識により、かさ、重さ、長さ、時間などが少しずつわかってきます。上下・左右や昨日・今日・明日などの時間の認識もできてきます。保育者は子どもに「あれ」や「それ」で話すのではなく、「上にある本を取ってきてくれる？」「セロテープの右側にあるハサミをもってきてくれる？」などと位置関係がわかる言葉掛けをすることが大切です。

幼児になり、かるた遊びをすると自分とまわりを比べる力がついてきて、文字を読むのが苦手な子は「かるた、嫌いだもん」といって入らない姿が見られます。それでは、経験が少なくなってしまいます。どの子もかるた遊びを楽しむための指導として、グループ対抗にするなどして、自分は１枚しか取れなくても１番になれる、グループで勝つために団結して楽しむことで、どの子もかるた遊びが楽しくなってきます。勝ち負けは、数えるのではなく取ったかるたを並べて、長さ比べをしたり、つみ重ねて高さ比べをしたり、重さ比べをします。生活や遊びの中で、子どもが体感を通して「重いね」「長いね」などと感じたことはこの先も忘れません。

幼児期は、小学校の土台として、保育者たちがどこを大切にしたいのか、何を経験して感じてほしいのかを考えることが大事です。

Ｖ、５歳児の保育

１、生活

最後の学年は、生活やあそびと共に心地よく生活する為、見通しを持つ力、段取りを考え準備する力、気持ちをコントロールする力、他者と協力する力が必要になってきます。

２、言葉の発達

言葉の形成として、聞いてもらう事で聞く力が育ち、言葉が発達します。言葉は、コミュニケーション力を高めます。保育者は、子どもの気持ちにぴったりのことばを代弁することで、子どもの伝達言語を育てていきます。

書き言葉の世界への準備期として、絵本やかるたやしりとりなどに触れ、「ことばっておもしろいな」という気持ちにさせ、集中することが大切です。

３、あそび

一人で遊ぶことは否定しませんが、「みんなで遊ぶと楽しいね」という気持ちを共有します。なかまと楽しく集団化し、新しいあそびに挑戦していきます。

４、友達との関わり

・大きくなることを喜びに、今の行動を続きにして行動しようとします。

・どんな相手にも、思いを言葉にしようとします。

・いつもとは違う集団（地域、他園との交流・お年寄りとの交流など）の中で、新しい関わりを知り、喜びや自信とします。

・みんなで考え、行動する楽しさを感じます。（話し合い・合意形成）

５、保育の中で大事にすること

・学校へ行く喜びを育てていきます（否定的な事は、言わないようにします）

・散歩やリズム遊びの中で、よりしなやかな体づくりをします。

・活動の流れの中で切り替えるリズムづくりをします。

・自分を表現する言葉を大事にします。

・相手の話を聞く力で、話し合う力をつけます。

・秘密を守る→自分だけの人間関係の構築をします。

・なかまと新しいあそびに挑戦し、困ったこと、大変なことをみんなで乗り越え喜びや自信にしていきます。

・表現活動を豊かにします。（体・描画･音楽・手先など）

６、接続期に当たっての子育て

親との連携と基本的生活習慣について

① 生活のリズムを作ります。これは、学習に向かう脳と体の発達に大きく関わってきます。

② 自分で出来る力を増やします。お家の人が何気なくやってしまっていることはないか見直していきましょう。

③ お手伝いをやってもらうことです。大人のお手伝いをし、褒められたり役立ったりすることは、子どもの自信を育て自尊心が豊かに育っていきます。遊びを継続したい気持ちを切り替えようとする自立的コントロールの力をつけます。この力こそ、学校の学びに向かう姿勢に繋がります。

就学のために特別に何かをするのではなく、0歳児からの育ちをもう一度丁寧に見ていきましょう。

終わりに

１，幼児期の遊び経験は、できるかできないかではなく、意欲的に楽しく取り組めるかということが重要です。

２，意欲・自信・なかまのつながりの深さを伴った「できる力」は、自信を育て、これからの学童期に向かって生きる力・学ぶ意欲に繋がっていきます。

３，何回も何回も失敗しても挑戦するのは子どもの心にある「やりたい」と思う自分からの意思・意欲で、大人でも止められません。こうした目標を持って挑戦する姿は、プロ選手の心と重なります。ただし幼児期は、そこになかまがいるからこそ挑戦できるのです。

こうした姿は、5 歳児ならではの姿なのです。

第７回　焼津市保育者資質向上研修会
令和３年 12 月 17 日（金）
会場：焼津市役所　大会議室１B